

埼玉県マスコット「コバトン」

令和7年産（令和6年播種）

麦類の作柄概況



令和7年7月
埼玉県農業技術研究センター

1 気象概況

(1) 気温

平均気温は、12月、2月、5月が平年並であったほかは平年より高い傾向にあり、特に6月は観測史上第1位の高温であった。

(2) 降水量

12月、2月がかなり少なく、6月は少なく、1月が平年並であったほかは多く推移した。特に5月2日は日合計53mmのまとまった降雨があった。

(3) 日照時間

3月、5月は少なく、4月が平年並であったほかは多く推移し、特に12月、2月は観測史上第2位の多照であった。

(4) 熊谷地方気象台の観測記録

		11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
平均気温 (°C)	本年	13.0	6.8	5.5	5.3	9.8	15.3	19.1	25.2
	平年	11.7	6.5	4.3	5.1	8.6	13.9	18.8	22.3
	平年差	1.3	0.3	1.2	0.2	1.2	1.4	0.3	2.9
	階級区分	高い	平年並	かなり高い	平年並	高い	かなり高い	平年並	かなり高い
降水量 (mm)	本年	66.0	0.0	18.5	5.0	93.0	121.5	181.0	113.5
	平年	53.5	30.9	36.5	32.3	69.0	90.7	115.1	149.5
	平年比	123%	0%	51%	15%	135%	134%	157%	76%
	階級区分	多い	かなり少ない	平年並	かなり少ない	多い	多い	多い	少ない
日照時間 (h)	本年	193.9	244.4	246.9	243.7	188.5	199.3	153.0	173.9
	平年	171.6	200.9	217.0	199.8	203.2	197.1	192.0	133.9
	平年比	113%	122%	114%	122%	93%	101%	80%	130%
	階級区分	多い	かなり多い	多い	かなり多い	少ない	平年並	少ない	かなり多い

*熊谷地方気象台「埼玉県の気象・地震概況」より

(5) 特徴的な気象と麦類への影響

特徴的な気象	麦類への影響
12月第3半旬の低温	出芽遅延、生育抑制
12月から2月までの寡雨	出芽遅延、生育抑制
3月、4月の高温	生育促進、登熟前進
3月から5月の定期的な降雨	生育促進、適正な登熟促進、赤かび病の発生助長
5月のまとまった降雨	倒伏の発生、品質低下、赤かび病の進展助長

2 作柄概況

(1) 当センター内 生育相調査結果（表2、表3、図1参照）

ア 小麦（さとのそら：11月25日播種）

播種時の土壌は適湿であり、碎土は良好であった。出芽期は平年（暖冬であった過去4か年平均）より2日遅く、出芽までの日数は1日長かった。苗立率は90%以上とおおむね平年並であり、苗立数は平年比97%の145本/m²確保された。

暖冬であった平年に対し、12月から1月上旬及び、2月の平均気温が平年並に推移したことや1月第2半旬を除き、2月までほとんど降雨のない状態であったことから、生育は遅れ、草丈、莖数ともに平年を下回って推移した。3月以降は高温傾向と定期的な降雨もあったため、生育が促進され、おおむね平年並に回復した。幼穂の分化は平年並であったが、幼穂長の伸長速度は平年より遅く、莖立期は平年より4日遅れ、出穂期は4月第1半旬の低温の影響もあり、平年より6日遅くなった。

出穂以降は高温傾向となったものの、5月第5半旬から6月第1半旬の気温が平年並から低く推移したことや、登熟後半が寡照であったため、成熟期は平年より8日遅くなった。

平年と比較し、弱小莖の天折開始は遅れたが、4月に入ると急速に進み、穂数はおおむね平年並となった。

全穂数から稈長が短い弱小穂等を除いた有効穂数は平年比96%であったが、出穂14日前追肥による粒数増加の効果もあり、1穂粒数が平年比108%と増加し、m²当粒数は平年比105%となった。登熟日数が2日延長されたこともあわせ、千粒重は平年比103%と増加し、整粒重は平年比105%（727kg/10a）となった。

外観品質は粒形、光沢ともに問題なく、おおむね良好となった。

イ 大麦（ニューサチホゴールデン：11月25日播種）

令和6年播よりビール大麦の県内作付品種を「彩の星」から「ニューサチホゴールデン」に全面切り替えたため、生育相調査においても品種を変更することとした。なお、前年播のデータとの比較である。

播種時の土壌は適湿であり、碎土は良好であった。出芽期、苗立率、苗立数はおおむね前年並となった。

前年は出芽後、2月まで高温に推移し、定期的な降雨があったが、本年の12月、2月の気温は平年並であり、1月第2半旬を除き、2月までほとんど降雨のない状態であったことから、草丈の伸長、莖数増加、葉位の進展いずれも遅れ、この傾向は春先まで続いた。莖立期は前年より7日遅かったが、3月の低温の影響を大きく受けた前年に対し、本年同月は高温傾向に推移したため、出穂期は2日の遅れにとどまった。成熟期調査では、稈長はおおむね前年並、穂数は前年比91%と少なく、穂長は前年比110%と長くなった。

5月2日以降の定期的な降雨により倒伏が発生し、倒伏程度は1.7(0~5の6段階：傾きの程度と面積割合で評価)と前年より軽度であった。このため、登熟期間は高温に経過したものの、前年同様、登熟が進まず、成熟期は前年より2日遅く、登熟日数は同等となった。

倒伏程度が大きかった地点において無効穂が発生したが、総穂数が少なかったことから有効穂数は前年比89%と少なく、1穂粒数は前年比107%と多くなったが、有効穂数の減少を補いきれず、m²当粒数は前年比95%となった。倒伏の発生程度は前年差-1.9と小さかったことや登熟後期に発生したため、登熟に与える影響は小さく、千粒重は前年比105%と増加し、整粒歩合が前年より16ポイント高くなり、整粒重は前年比128%(663kg/10a)となった。

外観品質は、収穫直前の降雨等により、光沢がやや弱く、特に倒伏程度が大きかった地点では軽度の地点と比較し、光沢は劣った。

(2) 県内全般

ア 播種作業

播種作業の進捗状況は、暖冬傾向の中で早播きを避けることが徐々に定着し11月6日現在で播種作業は行われず(平年では大麦4.5%、小麦0.7%)、11月中旬から播種作業が始まった。しかし定期的な降雨があり、11月20日現在で大麦15.2%(同59.0%)、小麦6.3%(同48.4%)とやや遅れた。11月末から好天に恵まれ作業は順調に進み、12月4日現在で大麦88.7%(同87.4%)、小麦54.5%(同83.2%)と小麦がやや遅れたが、12月18日現在では大麦98.6%(同98.4%)、小麦96.8%(同98.4%)となり、年内にはおおむね終了した(農業支援課調べ 平年は過去5年平均)。

イ 生育状況

11月播種のほ場では、播種後の気温と土壌水分が確保されたことから出芽苗立ちが良好で、初期生育は順調であった。12月中・下旬播種では気温が低下し、降雨もなかったことから出芽までに日数を要し、出芽・苗立ち割合が低下した。

2月の平均気温は平年並であったが、近年の暖冬傾向の中では過去10年で3番目に寒かった。また、12月以降少雨傾向が継続したことから、肥料

吸収が遅れ、生育量、特に分けつの発生が遅れた。12月上旬までに播種されたほ場では、おおむね必要な茎数を確保できていたが、12月中旬以降に播種されたほ場では出芽・苗立ち割合の低下とあいまって茎数不足のほ場が目立った。

3月は気温が高く、定期的な降雨により降水量が多かったことから、肥料吸収が活発となり、分けつの発生など生育が旺盛となった。最高分けつ期には12月上旬までに播種されたほ場では、おおむね目標とする茎数が確保されたが、12月中旬以降に播種されたほ場では茎数が少なかった。茎立期はおおむね平年並であったが、12月播種のほ場では11月播種と比較して10日程度遅れた。降雨で追肥作業が行えなかったほ場では肥料分が不足して葉色の薄いほ場が見られた。また、排水不良ほ場などでは下位葉の黄化など湿害の兆候が見られた。

出穂期はおおむね平年並であったが、麦が急速に伸長する茎立期から出穂期にかけて、気温が高く降水量が多かったことから、各地で湿害による生育不良が見られた。また、雨や強風の影響で倒伏の発生が散見された。

二条大麦では3月15日頃から出穂が始まったが、3月中旬以降、最高気温15℃以上の日が12日あった一方で、霜が降りるとされる最低気温4℃以下の日が連続して4日あり（降雪含む）穂ばらみ期から開花期の低温遭遇による凍霜害の発生が懸念されたが、目立った障害は確認されなかった。

近年の登熟期間は、高温・少雨による急速な強制登熟により成熟期も早まる傾向が多かったが、本年は定期的な寒暖と降雨により、じっくりと登熟が進んだ。

収穫作業は平年よりも5～7日程度遅れた。大麦では5月15日頃から始まり、5月28日現在で39.1%（平年76.5%）、6月11日現在で96.1%（平年99.3%）と成熟の遅れに伴いやや遅れたが、6月中旬におおむね終了した。小麦は6月初旬から始まり、6月11日現在で35.4%（平年71.8%）、6月25日現在では97.6%（平年99.4%）とやや遅れたが、6月末にはおおむね終了した（農業支援課調べ 平年は過去5年間平均）。

収量・品質は、子実の充実が良好となったことから、容積重が重く整粒歩合の高い多収型の登熟となった。12月中旬以降に播種されたほ場では、穂数不足により減収となったが、懸念された遅れ穂の発生が少なかったことから品質は良好であった。

ウ 病害

赤かび病については、本年の熊谷のアメダスデータから推定される赤かび病子のう胞子飛散好適日は、4月1日から4月30日までの積算日数が11日（平年同期9日）と過去10年で4番目に多く、5月1日から13日までの積算日数は11日に達した。なかでも、4月24日から5月13日までの20日間では子のう胞子飛散好適日の出現が16日に達しており、11月下旬以降に播種した小麦で最も感染しやすい開花期と子のう胞子飛散好適日が完全に一致した。また、播種が12月上中旬となった小麦ほ場では5月上旬から開花期となり、降雨に遭遇する頻度が高くなったことから、本病の急

速な蔓延が懸念された。(「令和7年度病害虫発生予察注意報第1号」(5/16) 埼玉県病害虫防除所)

このため県内全域で赤かび病の防除が行われ、一部では追加防除を実施したほ場も見られた。収穫時に倒伏したほ場を別刈りにしたり、調製を丁寧に行うなどしたが、一部、晩播で極端に刈遅れたほ場の小麦が農産物検査において赤かび病が原因で規格外となった。

うどんこ病は、茎数が少なく株元の通風性が良かったり、降雨の影響により夜温が低下した時期があったため、発生及び上位葉への進展が遅れた。また、出穂後の発生も少なかったことから、収量への影響は少ないと考えられた。

表 1 耕種概要

播種様式	条間 (cm)	麦種	品種名	播種期(月日)		播種量 (kg/10a)	施肥量(N:kg/10a)	
				本年	平年比 前年比		基肥	追肥
シーダーテープ	30	小麦	さとのそら	11月25日	11月25日	6.0	6.0	4.0
		二条大麦	ニューサチホゴールデン	11月25日	11月24日	6.0	7.0	2.0

注 1. さとのそらは平年値（暖冬であった令和 2～5 年播種の 4 か年平均）、ニューサチホゴールデンは前年値との比較（以下同様）。

注 2. 追肥時期 「さとのそら」：出穂 14 日前、「ニューサチホゴールデン」：莖立期。

表 2 生育調査

品種名		出芽期 (月日)	苗立数 (本/㎡)	苗立率 (%)	莖立期 (月日)	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	成熟期調査			倒伏 程度
								稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/㎡)	
さとのそら	本年	12.10	145	91	3.18	4.16	6.6	77.0	8.1	564	0.0
	平年	12.8	149	93	3.14	4.10	5.29	83.7	8.8	584	0.0
	平年比(差)	2	97	-2	4	6	8	92	92	97	0.0
ニューサチホ ゴールデン	本年	12.8	121	98	3.6	4.6	5.19	96.7	6.7	762	1.7
	前年	12.7	123	97	2.27	4.4	5.17	99.9	6.1	836	3.6
	前年比(差)	1	98	1	7	2	2	97	110	91	-1.9

注 1. 平年比、前年比は%。

注 2. 倒伏程度は 0～5 の 6 段階評価

表 3 収量及び収量構成要素

品種		精子 実重	整粒 歩合	整粒重	有効 穂数	1穂 粒数	㎡当 粒数	千粒重	容積重
		(kg/10a)	(%)	(kg/10a)	(本/㎡)	(粒)	(千粒)	(g)	(g/L)
さとのそら	本年	729	99.8	727	561	32.8	18.4	40.9	828
	平年	692	99.7	690	583	30.4	17.5	39.9	836
	平年比(差)	105	0.1	105	96	108	105	103	99
ニューサチホ ゴールデン	本年	727	91.3	663	720	22.6	16.2	50.1	728
	前年	689	75.3	519	811	21.2	17.2	47.8	742
	前年比(差)	105	16.0	128	89	107	95	105	98

注 1. 精子実重は風選により屑麦を除いた重量、整粒重は篩選(小麦 2.0mm、ビール大麦 2.5mm)後の重量。

注 2. 整粒歩合は、篩選(小麦 2.0mm、ビール大麦 2.5mm)による。

注 3. 精子実重、整粒重、千粒重、容積重は水分換算値(小麦 12.5%、大麦 13.0%)。

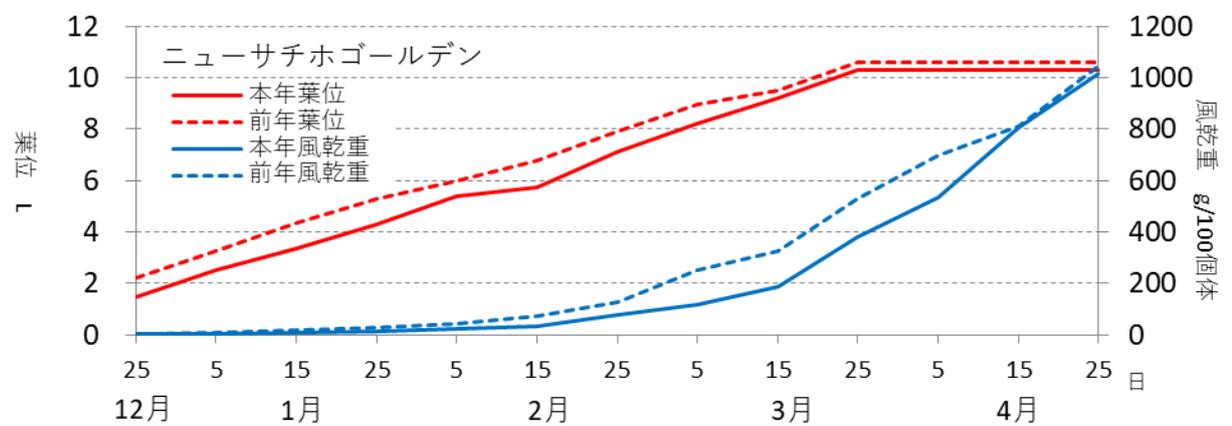
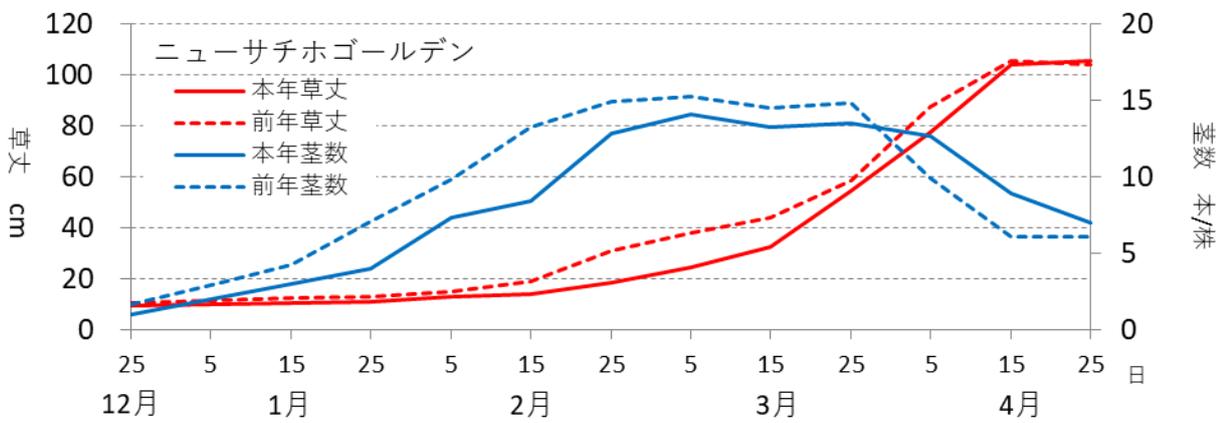
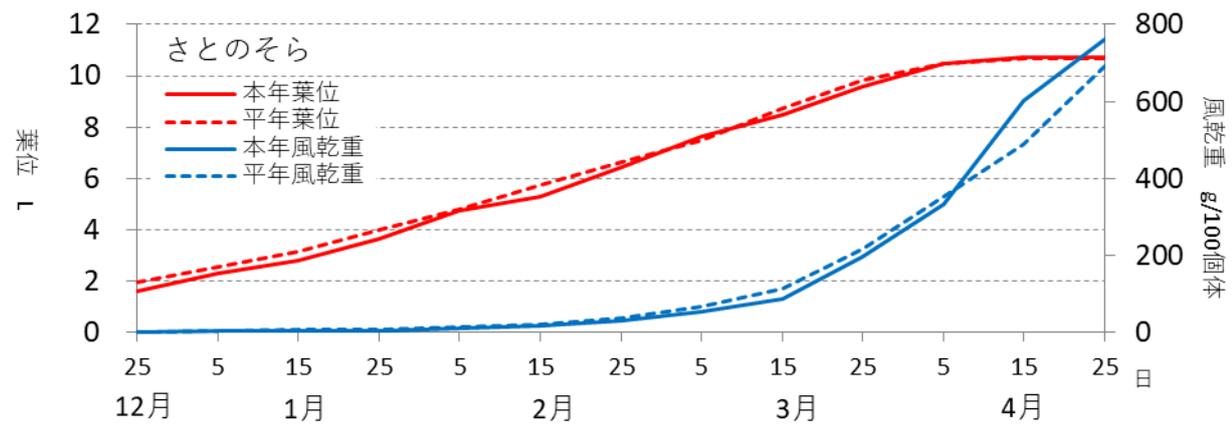
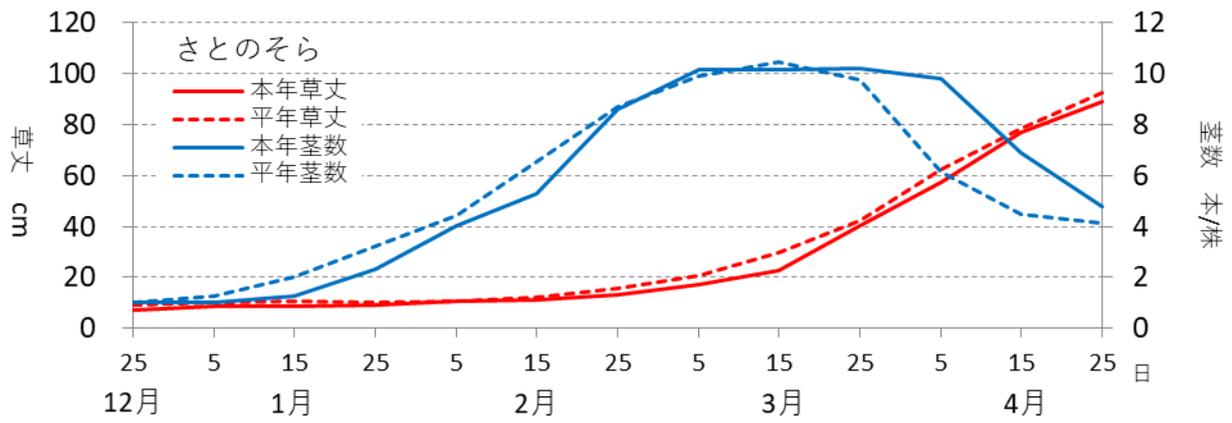


図1 生育経過

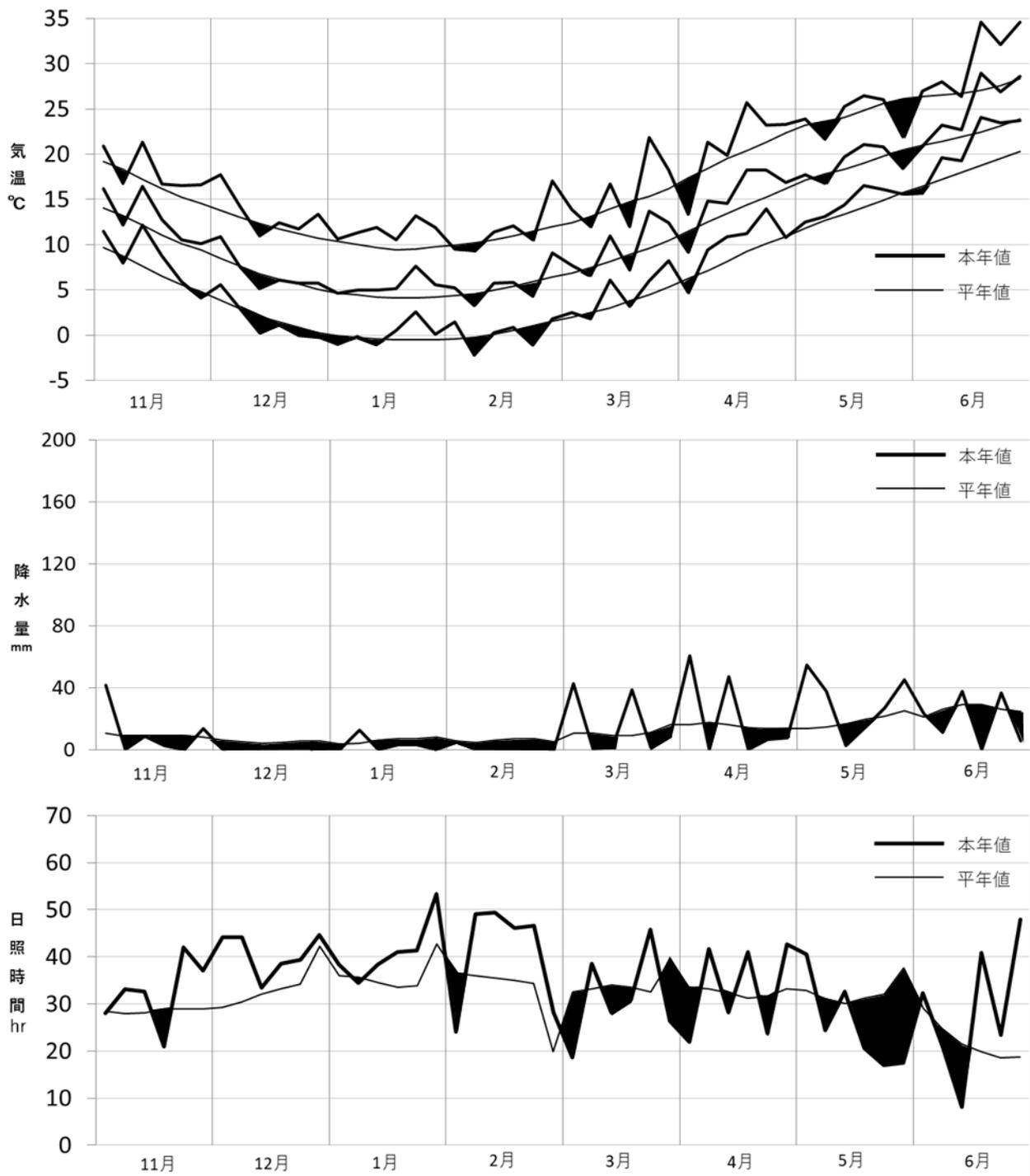


図2 令和7年産(令和6年播)冬作期間気象図
 (熊谷地方気象台日別データより作成)